

『吹けば飛ぶよな男だが』

渋谷龍太 著 KADOKAWA 2,200 円 (税込)

私を支える世界一カッコいいバンドマンの頭の中

会員 平見 ひかる (75 期)



私には、世界一カッコいいと思い、憧れ続けている人がある。

——人に騙されたとしても、自分は人を信じ愛し続ける。かっこ悪くならないために、かっこよく生きるために——

こんな、自分に胸を張った生き方をしていなければ歌えないような歌を堂々と歌い上げ、そのまっすぐな歌声で多くの人を魅了するのが、SUPER BEAVERのボーカル、渋谷龍太氏だ。「人として」という曲で、私が司法試験受験生の頃や、苦しい出来事がある度に、どれだけ辛くてもただひたすらカッコよく強く生きようと、泣きながら聞いていた曲だ。弁護士となってからも、仕事で悩んだときや嫌な思いをしたときにいつも支えられている。SUPER BEAVERにはいくらでも人に教えた名曲が存在するが、どの曲にもいえることが、歌声がまっすぐで、心に歌詞が直接飛び込んでくるということだ。どうしてこんなに心に響く歌が歌えるのだろうか、と、幾度となく思っていた。

最近、本を読んでいなかった。私は子どもの頃から、本の虫と言われるほど読書が好きだった。特に好んで読むのは小説で、ジャンルを問わず没頭してきた。

弁護士となって3年目を迎え、日々仕事に追われる中、少しずつ自分にできることも増えていき、自分のやりたい仕事や好きな仕事が見えてきた。ただ、一日の時間の大半が仕事に消え、とにかく時間が足りない。そんな中、ふと本が読めていないなと思った。もちろん仕事に関する法律の本は日常的に目にするが、娯楽としての読書からは離れてしまっていた。小説が読みたいけれど、読み始めると次が気になって仕事が手につかなくなるだろうなと思うと、本の世界に戻れなくなった。

そんな中、渋谷龍太氏のエッセイ集を思い出した。『吹けば飛ぶよな男だが』——選んだタイトルから人柄が出ている感じがする。エッセイ集というものは私の中で、温泉旅館に泊まった際に、部屋の外の自然の音と新鮮な空気をより感じるために読むような、心を豊かにする副菜的な位置付けで、主菜として腰を据えて読んだ経験はなかった。エッセイであれば忙しい時間にも少しずつ読むことができるのでは。そう思い、手に取り読み始めてみた。

ああ、そういうことあるよね。そんな日常によくある光景の一部を切り取って、そこについて渋谷氏が考えていること感じていることが書かれている。映画館のスクリーンから出た後、映画館を出るまでに同じ映画を観た人たちとしばらく同じ道を歩かなければならず、他の人の講釈を垂れるのが耳に入ってきてしまう話や、蕎麦屋で水のピッチャーを置く際の取っ手の向きにその人の気遣いが出るという話など。

読んで最初に感じたことが、エッセイってこんなに面白いんだ、ということだった。また、この方はこんなに色々なことを考えているのかと驚愕した。このエッセイ集の一番の魅力は、各タイトルの読後感が素晴らしいことにある。読んでいる最中は何となく人に共有したくなるような気持ちになるのに、読み終わった後はひとり静かに自分の心で咀嚼したくなる、そんな、日常にフォーカスをあてた映画を観終わったような読後感で、とても気持ちが良い。

久々に手に取った本がこれで良かった。そう思った。SUPER BEAVERを知らずに読んでも間違いなく楽しめるだろう。最近本から離れている方、時間に追われている方にも、ぜひお手に取っていただきたい一冊だ。